

月が映す 人々の暮らしと想い

上弦じょうげんの月

十三夜

豆名月

十五夜
芋名月

十六夜

下弦かげんの月

原七郷はお月夜でも焼ける

新月はつきく 八朔はつさく

月光は葡萄に甘味そそぎをり
福田甲子雄

月待つきまち

団子突き

二十三夜

令和2年10月1日は仲秋の名月です。古くから人々は日々姿を変える月にそれぞれの想いを重ねてきました。今月は月が映しだしてきた人々の暮らしと想いを観ていきましょう。

時・季節を知る月の暦

明治5年以前、日本の暦には主に月と太陽の動きから考えられた太陰太陽暦(旧暦)が用いられてきました。人々は月の満ち欠けで時を知り、季節を感じ、種まきや収穫などの農作業や祭りなど暮らしにかかわる時期を決めていたのです。9月1日有野地区で行われている八朔祭りの「朔」は、月が見えなくなる新月、1日を意味しています。旧暦8月1日のこの日、暴風雨を避け五穀豊穡を祈願する祭りが行われてきました。

情緒を感じる

人々は月の美しさに惹かれ、その想いを月に映し、俳句や和歌、絵画などに表現してきました。江戸時代後期、落合を拠点に活動した俳人辻風外は月を主題とした句を多数詠んでいます。

名月や朝と晩との山乃うへ
祈りと感謝そして娯楽へ

人々は月の満ち欠けそれぞれに神や仏を感じ、信仰してきました。江戸時代から明治時代、決まった月齢の日に仲間が集まり飲食を共にして月の出を待ち、安産や無病息災、五穀豊穡を祈願する「月待」が市内でも行われていました。最も信仰を集めたのは二十三夜で、その月は勢至菩薩と考えられました。この月待を記念して建てられた「二十三夜塔」などの石塔は市内各地で見ることが出来ます。一方夜を徹して行われる月待は娯楽でもありました。



二十三夜塔 秋山

また、満月の十五夜と十三夜も特別な日と考えられました。満ちた月を秋の実りの豊かさに例え、月の神さまに収穫を感謝したのです。この日は縁側に団子や里芋、豆類、大根、栗、ぶどうなどが供えられ、神様の依り代(註1)としてススキが飾られます。中でも供え物

として欠かせなかったのは里芋です。十五夜は「芋名月」とも言われ、芋を中心とした畑作物の収穫と月の信仰の深いつながりがうかがえます。

団子突き

昭和30年代以前、十五夜の夜に子どもたちが縁側に飾ってある団子や供物を釘などを付けた竹竿でそと突いて盗ってくる「団子突き」という風習がありました(註2)。お供え物が盗られても縁起がいいとされたのは、月の神様が持ち帰り豊作になると考えられていたためです。この日子どもたちは朝から道具を用意し、作戦会議を開き家々の分担を決め、団子やお供えものを突きにいったことを市内でも多くの方が記憶しています。もちろん盗みは禁じられています。人々が月の神さまに豊作を約束してもらい感謝するための伝統的な昔の風習だったのです。



コロナ禍の現在、かつての月待のように仲間が集い飲食をともにすることは難しい状況です。けれど遠い空の下でも同じ時に月を仰ぎ見れば、その光が人々の想いをつないでくれるはず。です。

※1 神霊が現れるためよりつく物。
※2 地域によっては子どもたちが各家を訪問して、お供え物をいただく形もありました。今では団子突きは途絶えています。愛知県では子どもが近所の家を巡り歩きお菓子をもらう形に変えて風習が続いている地域もあり、「お月見どろぼう」と呼ばれています。